

様は必ず救って下さいます。
「これすなわち、第十八の、念
仏往生の誓願のころなり。」
これがすなわち、阿弥陀様が四
十八の願を建立された十八番目
の念仏往生の願で、『南無阿弥
陀仏を称えてくれた人を、往生
させることができれば、わ
たくしは仏と成りません』との
誓いのころであります。
「かくのごとく決定してのうえ
には、」
このように信心を決定させてい
ただいたならば、
「ねてもさめてもいのちのあら
んかぎり、称名念仏すべきも
のなり。あなかしこ あなかし
こ。」
寝ているときにも起きていると
きにも、生涯を通じてご恩報謝
のお念仏を称える生活をさせて
いただきますよう。

題材法話

⑥

今回「阿彌陀如来」の興出、唯説阿彌陀本願海五濁惡時、群生海、信如来実言」の4句を味わいます。阿彌陀様の教えそのものが、讃嘆されてきました。が、ここから「難中之難無過斯」までの24句は、その阿彌陀様の教えを私たちに示して下さったお釈迦様について詠まれています。まず4句を意識してみますと、

「お釈迦様（ここでいう如来とはお釈迦さまのこと）が、この世にお生まれになられたのは、ただただ阿彌陀様のご本願を説くためでありました。五濁（五つの濁りで示された末法の世）といわれる煩惱に満ちた世に生きる私たちは、そのお釈迦様の真実の言葉を信じて応えていかなければならいませぬ」

おおよその意味はご理解頂けると思いますが、



○お釈迦様ご誕生の意味
つまり最初の2句には、何故お釈迦様が、この私たちに人間世界にお生まれになつたのか（これを仏教学では「出世本懐論」といいます）が述べられており、親鸞聖人は「ひとえに阿弥陀様のお念仏の世界を私たちに伝えるためである」と仰るのです。

お釈迦様は80歳で亡くなられるまでの40年間、八万四千の法門と呼ばれる数多くの教えを説かれました。

その沢山のお経の中で、阿弥陀様のご本願が説かれてゐる「仏説無量寿経」というお経を説くために、お釈迦様は、私たちのこの世界にお生まれになつたのだと、親鸞様は仰るのです。

○私にとつての
真実の教えとは

では、他のお経は一体どうなるのでしょうか？
もちろんお釈迦様が説かれたお経ですから、真実でないお経が、あるはずはありません。



たといえば、自力行（自分の力で仏になることを目的とする）の天台宗や日蓮宗では「法華経」というお経こそが、いわゆる出世本懐のお経だとされていきます。このことを、どのよう理解すればよいのでしょうか？

このような話を聞いたことがありません。

「ある人が雨上がり、ふと橋の上から下を見たところ、どういいうわけか一匹の親犬と3匹の子犬が、川の中州に取り残されていました。どうしたものか」としばらく見ていたところ、突然親犬が川に飛び込み、必至に岸まで泳ぎ着いて、すぐさま子犬たちに「おまえ達も早く泳いでこい」とばかりに吠え続けたそうです。そこで子犬たちはその声に励まされるように、つぎつぎに川に飛び込み岸に向って泳いだそうです。3匹の子犬の中で、見るからにひ弱そうな一匹の子犬だけが川の途中で今にもおぼれそうになってしまっ

見た親犬は、再び川



に飛び込み、その子犬を口にくわえて、なんとか無事に岸までたどり着いたのだそうです』

無事にたどり着いた二匹の犬にとつても、川を泳ぐ手本を示してくれた親犬は間違ひなく、真実の親です。けれども、川に溺れるしかなかつた子犬にとつては自分をくわえて向こう岸まで泳いでくれる親犬であつたればこそ、かけがいのない「私の親」なのです。

○親鸞様と親との出会い

お釈迦様は、私たちが向こう岸（彼岸）にたどり着くための沢山の教えを示して下さつています。

20年間、お釈迦様が説かれたあらゆるお経の中に、自分の救いの道を求められたのです。

けれども、最後の最後にとどり着かれたのは、川におぼれるしかない自分の発見であり、同時に「まかせよ」と誓つてくださる南無阿弥陀仏の親との出会いだったのです。

以下次号

7月例会住職法話より

